

2016年7月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾／

仏教と神々

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫(p.283)／実践の方法(道)に関する経典群／諦相應／5 如来所説／(この経文は4つに分けて考えることができます。今回は、第四の部分から、神々が釈迦牟尼世尊の説法を讃えたところを学びたいと思います)

(2) 主題

仏教に登場する神々について学び、その意義について学んでみたいと思います。

2. 神々の讃嘆

釈迦牟尼世尊の初めての説法(初転法輪)によって、五比丘の一人コーンダンニャが法眼を得たとき、神々がこぞって讃嘆しました。

(1) 経文

「また、世尊が、このように法輪を転じ(正法を宣説すること)たまえる時、地に居る神々は大声をあげていった。

『世尊は、バーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、このように無上の法輪を転じたもうた。それは、もはや、沙門・婆羅門、あるいは、天神・悪魔・梵天、もしくは、この世界の何者たりとも覆(くつがえ)すことはできないであろう』

(以下、四大天王・忉利天(とうりてん)の神々、焰摩天(えんまてん)の神々・兜率天(とそつてん)の神々・化乐天(けらくてん)の神々・他化自在天(たけじざいてん)の神々・梵天界の神々も、大声をあげて同様に讃嘆する)

かくして、その刹那、その瞬間、たちまちの間に、その声は、梵天の世界にまでも達した。そして、この十千世界は、ゆれ動き、震い動き、大ゆれにゆれ動いた。また、かぎりもない広大な光明がこの世間に現じて、もろもろの神々の神の威光をも超えたのであった」(増谷文雄著『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.287~288)

(2) インドの神々

ここに上がっている神々は、古代インドの人びとが信仰していた土着神であると思われます。

ついでながら四大天王とは、持国天・増長天・広目天・多聞天(毘沙門天)で、仏教では、守護神になっています。

(3) 天部の神々

仏像のジャンルに「天部」があります。これについて、次のような説明がなされています。

「天の仏像のルーツは、初期仏教の時代に、古代インドで広く信仰されていたバラモン教の有力な神々を、仏教に取り入れたもの」（「天の仏像のすべて」 榎 (い) 出版社、p. 16)

同書によれば、次のような神々が、仏教に取り入れられているようです。

初期天部：四天王・梵天・帝釈天・阿修羅・執金剛神など

中期天部：吉祥天・弁才天・十二神将など

後期天部：大黒天・鬼子母神・韋駄天・摩利支天・歓喜天など

3. 法輪

(1) 法輪を転じる

「法輪を転じる」とは、法を人びとに説き広め、多くの人を救うことです。

「法輪を転じる」という言葉の背景には、転輪王の説話があります。

新国訳大蔵経インド撰述部『阿含部 1 長阿含経 I』（大蔵出版）所収の「転輪聖王修行経」から、概略を見てみましょう。

(2) 転輪王の説話

徳の高い王が現れると、どこからともなく黄金の輪宝が現れて塔の上に輝きます。この徳の高い王が転輪王です。

転輪王は、徳の象徴である輪宝を先頭に、周囲の国々に向かいます。

転輪王が訪れると、国王は財宝を差し出し、服従を誓います。

転輪王は、国王に、法に依拠して国を治めるようにと指示します。

転輪王は、輪宝を先頭に、次の国に向かいます。

こうして、転輪王の支配する国々は栄えるのです。

逆に、徳の低い王が現れると、輪宝は現れず、政治は乱れ、国は乱れて、衰亡に向かうとされています。

（この神話は、政治家・官僚・経営者などの現代のリーダーたちに、熟読玩味していただきたいものだと思います）

(3) 法輪を転じる

この説話になぞらえて、仏の教えを人びとに伝える活動を、法輪を転じると言います。

神々は、釈迦牟尼世尊による初めての説法（初転法輪）に対して、無上の法輪が転じられたと言って歓喜しているのです。

こののち、法輪はとどまることなく転じられて、現代の私たちに至っています。私たちはさらに世間に向かって、また未来に向かって、法輪を転じるべきでありましょう。

4. 神々が歓喜する理由

釈迦牟尼世尊が初めて説法したことを、神々がこぞって歓喜しました。このように大喜びするには、わけがあるのです。

成道した釈迦牟尼世尊は成道直後の思索の中で、この法を人々に伝えるのはやめようと思いましたが。世間の人びとは迷いが深く、法を説いても、とても理解できないであろうと思ったからです。

そのとき、多くの神々が釈迦牟尼世尊のもとに訪れ、こぞって説法を懇願しました。

懇願された釈迦牟尼世尊は、もう一度考えを巡らせて、世間には、法を説けば理解できる人もいるに違いないと考え、説法する決意をしたのでした。

このような経緯があるために、ここで神々が大喜びしたというわけです。

5. 神々の言葉の意味

(1) 「バーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて」

「バーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて」とは、単に地名を言っているだけでも受け取れますが、ここでは「人間社会において」と受け取りたいと思います。現実には生きている人間のために、初めて教えが説かれたからです。

(2) 「覆すことはできない」

釈迦牟尼世尊が説いた法は、「沙門・婆羅門、あるいは、天神・悪魔・梵天、もしくは、この世界の何者たりとも覆すことはできないであろう」とあります。

「覆す」とは、釈迦牟尼世尊の説いた教えは間違いであると論破することでしょうから、「覆すことはできない」とは、論破できないということです。

実際、さまざまな人が釈迦牟尼世尊に論争を挑みましたが、ついに論破されることはありませんでした。

(3) 広大なる光明

この経文は「かぎりもない広大なる光明がこの世間に現じて、もろもろの神々の神の威光をも超えたのであった」と結ばれています。

仏教で「光明」は、「智慧」の象徴として使われています。真理を知る智慧、真理に基づく教えを説く智慧は、神々でも覆すことができないものであり、神々の威光を超えるものなのです。

6. 仏教と神

(1) 仏教は絶対神を説かない

仏教では神を説かないと言われます。確かに、仏教から生まれた神は存在しません。

庭野日敬師は、次のように述べています。

「〈空〉とは、すべてのものごとは縁起の法則によって存在しているのであって、あるものが絶対的存在であるとか、すべてのものごとの根源の存在である、というものは何もないということです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.16）

したがって、「絶対的存在としての神」や「すべてのものごとの根源の存在としての神」は、存在しないということになります。

(2) 神がいると信じる人々、

世間には、「神がいると信じる人々」が多数存在します。事実を重んじる仏教は、この事実も重んじるのです。

釈迦牟尼世尊は、民衆が神々を崇めることを否定することなく、教えの中に取り込んでいったようです。

(3) 正しい信仰への誘い

釈迦牟尼世尊は、相手に寄り添いながら教えを説きました。

神々を信じる人々に教えを説くときには、「このように実践すれば、あなたが崇める神々も喜びますよ」と、説いたのではないのでしょうか。

(4) 真理の象徴

仏教の経典に登場する抽象的な神、仏、菩薩が、真理や徳の象徴になっていることがあります。「象徴」とは、「形のない思想をある形に現して述べる」という、文章上の手法です。

たとえば、妙法蓮華経では、文殊菩薩は智慧の象徴、弥勒菩薩は慈悲の象徴、普賢菩薩は行の象徴とされています。

(5) 心理描写

増谷文雄博士は、経文の中に神々が登場するのは、心理描写のひとつであると考えているようです。「たとえば、釈尊の胸奥になにかすぐれた発想が生れ、あるいは所信が確立したというような場合には、それを描写するに、こんどは梵天説話の文学形式をもってする」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.092-093）とあります。

その意味では、ここに描写された神々の大歓喜は、釈迦牟尼世尊の大歓喜であると見ることができます。

7. 宗教心

庭野日敬師は、宗教心について、次のように述べています。

(1) 神・仏

「いままでは神とか仏とかにまったく無関心で、ただ日々の生活に夢中になっていた人が、ある危機に直面して、なにかにすがりつきたい気持ちになったとき、もしくは物質生活に満足しきってしかもなんとなく空しいものをおぼえ、なにか心の満足をあたえてくれるものはないかとおもうとき、その〈すがりつきたい〉〈心の満足をあたえて欲しい〉とおもう相手が、たとえ自分では意識しなくても、じつは神・仏なのです」(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p. 165~166)

(2) 宗教

「このように、歴史的な存在であった仏さまでもよし、抽象的な存在である仏さまでもよし、とにかくほんとうに自分を救ってくれるものを、のどが渴いた人が水を求めるように求め、恋あこがれる思いがあってこそ、その人の心は清められ、救われるのです。宗教が、哲学や道徳の教えとちがうところは、その一点にあるのです」(同書、p. 166)

(3) 哲学・道徳

「りっぱな哲学や道徳の教えは、頭(表面の心)で『なるほどそうか』と理解するものです。すべての人が、それを理解し、そのとおりに実践できれば、問題はありません」(同書、p. 166)

(4) かくれた心

「ところが、じっさいにはなかなかそうはゆきません。〈表面の心〉ではわかっている、人間には〈かくれた心〉という始末のわるいものがある、それがしらすらすのうちに人間をまよわせ、よくない行動をさせるのです」(同書、p. 166)

(5) 宗教・信仰

「ですから、この〈かくれた心〉までも清めなければ、人間は救われないのですが、それをしてくれるのが宗教であり、信仰なのであります」(同書、p. 166~167)

8. 宗教・信仰の救い

「ほんとうに自分を救ってくれるものを、のどが渴いた人が水を求めるように求め、恋あこがれる思いがあってこそ、その人の心は清められ、救われるのです」とあります。

自分本位の欲望や怒りを忘れて、「お救いください」と身も心も投げ出すような心境になれたことが、大きな救いです。このような心境になりますと、正しい道を見つめ、歩むこともできるようになります。本質的な救いに入ることができるのです。

これこそ、宗教・信仰の救いというものでありましょう。